

八正神明論を読む

令和七年

十一月二十三日

青鳳会講師

吉野 久

素問と靈枢とは、このような書物ですという案内の講座を毎年行っているが、コロナ禍が明けた年には、素問・靈枢を通してもっとも重要と考えられる靈枢の「九鍼十二原」を取り上げた。

靈枢の九鍼十二原には、手足の八関節に経脈の原穴を求め、これを「氣穴（氣の出入りする穴）」と定めて、小鍼をもってここから患者の氣に働きかけるといふ、現在の我々が行なっている毫鍼治療について記載されている。

いま「現在の我々が行なっている毫鍼治療について記載されている」と一言で述べたが、現在の我々が、靈枢の原形が整った後漢時代、すなわち1800～2000年前のノウハウをそのまま用いて、治療を行なっているということは、ほとんど奇跡のようなことではないだろうか。

それはさておき、去年、私は素問「寶命全形論（命を寶とし、形は身体を全からんとする）」を案内した。その理由は、そもそも出発点の違う素問と靈枢の立場が、ここではつきりしてくるからである。「寶命全形論」には「2-2 是を壊府と謂ひ、毒藥も治すること無く、短鍼も取ること無し」「6-2（九鍼十二原の刺法を指して）今は末世の刺なり」といった、明確に靈枢派を否定する言葉もみられた。これは、いま素問・靈枢と並び称されるこの両書が、実は大きく立脚点を異にしているということを表わしている。

こうした素問と靈枢が持っている「物語」を知ること、皆さんがさらに素問・靈枢の世界に親しみを持って下さることを願っております。

Ⅰ 八正神明論の概要

「八正神明論」「離合眞邪論」は、それぞれ『全元起本素問』の第一・二巻にある。全元起本の第一・二巻にある各篇は、『靈枢』の九鍼十二原を目標として、それにどう『素問』学派として対応するかを念頭にまとめられている。（『寶命全形論』は全元起本第六巻）

（島田隆司）

1 鍼術を身に付けるための法則とは何か

天地の法則に法り四時八正の氣を候って刺すことだ。

2 恒星の運行と八正を観測する所以

恒星が、日と月の運行を制しているし、季節ごとに八正（八つの方角）から吹く八風の虚邪が人を害するので、この二つを観測しなければならない。

また、「冥冥」に観る、ということが説かれる。これは、気の世界は、目に見えず、手にも触れられないが、鍼の上工だけは、それが分って治療に当たっているということを表わしている。

3 三部九候論による治療

素問学派独自の三部九候論にもとづく治療の重要さが説かれる。加えて鍼の上工と下工、補寫法（ここでは員法Ⅱ補と方法Ⅱ瀉法）についても説かれるが、いずれも靈樞派をつよく意識した文となっている。

4 形と神・・・「冥冥」の世界に出入りする鍼工の神秘的・超人的能力

形、神ともに「九鍼十二原」に表れる重要な概念だが、素問ではその以前に「冥冥」の世界を提出して、目に見えず・手でも触れられない気の状態を診察して治療にあたる鍼工の、神秘的・超人的な能力について語っている。

ここも、「九鍼十二原」の「神乎神」という特徴的な句（決め台詞）を用いながらも、新たに「形乎形」という句まで創って、あくまでも「九鍼十二原」に対抗しようとする姿勢が明確である。最後には「九鍼の論、必ずしも存（のこ）らざらん」とまで結論するのは、素問としても珍しいと言わざるを得ない。

□ 詳 論

1 鍼術を身に付けるための法則

天地の法則に法り四時八正の気を候つて刺す

八正神明論篇第二十六 新校正云按全元起本在第二卷又與太素知官能篇大意同文勢小異
黃帝問曰用鍼之服必有法則焉今何法何則 服事也法象也
則準也約也 岐伯對曰法天則地合以天光 謂合日月星辰之行度 帝曰願卒聞之岐伯曰凡刺之法必候日月星辰四時八正之氣氣定乃刺之 候日月者謂候日之寒溫月之空滿也星辰者謂先知二十八宿之分應水漏刻者也略而言之常以日加之

《読み下し文》

1-1 黄帝問ふて曰く、鍼を用ゐて服(身に着ける)すは、必ず法則、有らん、今、何に法り、何に則らん。

1-24 天に法り、地に則らば、天光に合さん。凡そ刺の法は、必ず日月星辰(恒星)、四時八正の氣を候ひ、氣、定まれば乃ち刺す。

《現代日本語訳》

黄帝が問うて言うには、刺鍼の術を身につけるには必ずその法というものがあるだろうが、何に法つとり、何に従えばよいのだろうか。

岐伯が天の法則に法つとり、地の法則に従えば、天光に合致することができるとしよう。およそ刺鍼に際しては、必ず太陽と月・恒星の位置、それから四季時々の氣の模様、八節(立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至)の正氣を候い、その氣に対する判断が定まってから刺します。

素問・四氣調神大論2の精神に通ずる

1-1 春三月は、此を發陳と謂ひ、天地、俱に生(は)る(成長する)、萬物、以て榮ゆ。夜は臥し、早く起き、庭に廣く歩み、髪を被(き)り形を緩め、以て志を生(の)ば使め、生ばして殺す勿れ、予へて奪ふ勿れ、賞(たふと)びて罰する勿れ。此れ春氣の應にして、養生の道なり。之に逆すれば則ち肝を傷り、夏に寒變を爲し、長を奉ずれば少なし。

「春の三ヶ月は「發陳」と言い、天も地も、ともに成長し、万物は榮える。夜は寝てしまい、朝は早く起き、庭を広く歩き、髪のを束ねを切り、衣服をを弛めて、意思も伸び伸びさせる。これに反して秋令に法った生活をすれば肝を傷ることになりへ金剋木、夏に寒變を起す。夏令である長を奉ずる生活をおくる者には、こうした病は少ない」

【靈 枢】

《読み下し文》

8 小鍼の要は陳ぶるに易く、入る※に難し。羸^そは形を守り、上は神を守る、神なるかな神。

《現代日本語訳》

小鍼を用いた治療の要は、言うのは簡単だが、身につけるのが難しいのである。粗工は刺す形を守っているだけだが、上工は鍼治に付随する優れた精神を守って刺す。工の神技こそ、まさに神威の現れである。

※入 ある境地に達する、進む

入玄「思ひ玄に入る」奥深い思いになる(宋・蘇軾)

入妙「吟詠を喜び、顛草(草書)を善くし、梅を画(えが)きては尤も妙品に入る」(清・錢泳輯『履園叢話』)

■ 用鍼の服

『靈樞』の官能 73

用鍼之服、必有法則、上視天光、下司八正、以避虚邪、而觀百姓、審於虚實、無犯其邪。

「用鍼の服は、必ず法則有り。上は天光を視、下は八正を司る。以て虚邪を避け、百姓を觀じ、虚實を審らかにし、その邪を犯すこと無かれ」

・素問を意識した論となつてゐる。

2 恒星の運行と八正を觀測する所以

氣失紀故 帝曰星辰八正何候岐伯曰星辰者所以制
淫邪起 日月之行也 制謂制度定星辰則可知日月行之制度矣略而言之周
天二十八宿三十六分人氣行一周天凡一千八百周身
十六丈二尺以應二十八宿各漏水百刻都行八百一十丈以分晝夜也故人
十息氣行六尺日行二分二百七十息氣行十六丈二尺一周於身水下二刻
日行二十分五百四十息氣行再周於身水下四刻日行四十分二千七百息
氣行十周於身水下二十刻日行五宿二十分一萬三千五百息氣行五十周
於身水下百刻日行二十八宿也細而言之則常以一十周加之二分又十分
分之六乃奇分盡矣是故星辰所以制日月之行度也 新校正云詳周天二
十八宿至日行二十八宿也 八正者所以候八風之虚邪以時
本靈樞文令具甲乙經中 至者也 八正謂八節之正氣也八風者東方嬰兒風南方大弱風西方折
風也虚邪謂乘人之虚而為病者也以時至謂天應太一移居以八節之前
後風朝中宮而至者也 新校正云詳太一移居風朝中宮義具天元玉冊
時者所以分春夏秋冬夏之氣所在以時調之也八正
之虚邪而避之勿犯也 四時之氣所在者謂春氣在經脉夏氣在
孫絡秋氣在皮膚冬氣在骨髓也然觸冒
内經八 一六 鄭俊

41 帝曰く、星辰八正は何ぞ候ふ。

帝が言うには、星辰八正を候うのは何故か。

42a 岐伯曰く、星辰は、日月の行(めぐ)りを制する所以(ゆえん)なり。

岐伯が答えて言うには、星辰(恒星)を候う(位置を觀測すること)は、日月の行(何月何日であるか)を決定する根拠です。

42b 八正は、八風の虚邪を候ひて、時、至ると以(な)す所以なり。

八正は、八節の風の虚邪を候うことによって、決まった時節がめぐつて来たと決定する根拠となるものです。

42c 四時は、春夏秋冬夏の氣の所在を分け、時、調ふと以(な)す所以なり。八正の虚邪は、而ち之を避けて犯す勿れ。

四時とは、春夏秋冬の生長收藏の気を分けて、季節の気が調ったと決定する根拠となります。八節の風気の虚邪というものは、避けて犯されることがあつてはなりません。

※八風：〈鍼解篇〉東方・明庶風、東南・明庶風、南方・景風、西南・涼風、西方・闔闔風（シヨウコウフウ）、西北・周風、北方・広莫風、東北・融風、王氷：八正、謂八節之正氣也。八風者、東方嬰兒風、南方大弱風、西方剛風、北方大剛風、東北方凶風、東南方弱風、西南方謀風、西北方折風也。

日月の運行を測定し、八正を候う理由は、自然と調和した生活、自然のめぐりに沿った生活を送るため。

馬元台「八正者八節之正氣也。四立二分二至曰八正」

●八正については二説ある。

① 四立、二分、二至、すなわち立春、立夏、立秋、立冬、春分、秋分、夏至、冬至の八つの節氣を指す。

② 『史記』律曆書の注として書かれた司馬貞の『索隱』には、「八節の氣 以て八方の風に応ずる」とあり、八方の風に意味をおいている。Ⅱ東西南北、東北東南、西北西南Ⅱ王注と同

於天故云天忌犯之
則病故不可不知也
帝曰善其法星辰者余聞之矣願聞法
往古者岐伯曰法往古者先知鍼經也驗於來今者
先知日之寒溫月之虛盛以候氣之浮沈而調之於
身觀其立有驗也
候氣不差
故立有驗
觀其冥冥者言形氣榮衛

5-12 帝曰く善しと。其れ星辰に法るは、余、之を聞けり。願はくば往古に法るを聞かむ。

岐伯曰く、往古に法るとは、先づ鍼經を知る也。今來（今と将来）に驗すとは、先づ日の寒溫、月の虛盛を知り、以て氣の浮沈を候ひて身に調へれば、其れ立ちどころに驗（しるし）有るを觀る也。

帝が言うには、善しと。恒星の運行に法ることについては、すでに聞いた。今度は往古の時代に、恒星の運行にどのようなように法った学問と生活があつたのかを聞きたいものだ。

岐伯が言うには、往古の法に法するには、まず靈樞經の元となった鍼經、なかでも古鍼經を理解すべきです※。現在を正しく知り、将来についての正確な予兆を得るには、まず日の寒温、月の虚盛を知り、それに従って気の浮沈を候い、身体を調えれば、立ちどころに驗（しるし）が現れることでしょう。

※靈樞から引用した詳細な王氏の注は、当篇 1-4 に附してあり、これは衛氣行の内容を引いている。

九鍼十二原を見るかぎり、靈樞では時制にこだわらずに治療に当たると思われるが、古い時代には時制に従った治療法を採っていたとも考えられる。この資料の9頁に見られる「大要」などが、この古鍼經にあたると思われる。

■靈樞では、季節や時制にこだわらない。

九鍼十二原 58 無實無虚（無實實虚虚「甲乙、無實實無虚虚」太素）。損不足而益有餘、是謂甚病、病益甚。

實せるを實する無かれ、虚せるを虚する無かれ。足らざるを損ひ、餘り有るを益せば、是を甚病と謂ひ、病、益々甚しからん。

■神秘論・超人論・・・「冥冥に観る」

身觀其立有驗也候氣不差觀其冥冥者言形氣榮衛
之不形於外而工獨知之明前篇靜意視義觀適之變是謂冥冥莫知其形也雖形氣榮衛不形見於外而工以心神明悟獨得其衰盛焉善惡悉可明之新校正云按前篇乃寶命全形論以日之寒温月之虚盛
四時氣之浮沈參伍相合而調之工常先見之然而
不形於外故曰觀於冥冥焉工所以常先見者何哉以守法而神通明也通於無
窮者可以傳於後世也是故工之所以異也法著故可傳後世後

6-1 其の冥冥に観るとは、形氣、榮衛の外に形（あらは）れざれども、工、獨り之を知るを言ふなり。

「冥冥」を観るとは、身体のが、榮衛（血中の栄養成分と、身体を動かす気※）となつて目に見えていなくとも、鍼の上工だけには、それが分つていいるということです。

※有貨、以衛身也。貨を有つは、以て身を衛（いとな）む也。財産を持つのは、それで身を養うためである。〈國語・魯下〉『漢辭海』とあり、これにしたがえば、「衛氣」とは、「衛（まも）る」の義に重点を置いた、身体防御の機構と考えるより、身体を衛（いとな）む働きを受け持つ気だと考える方が、はるかに自然ではないだろうか。

6-2 日の寒温、月の虚盛、四時の氣の浮沈を以て參伍（比較して調べる）し、相ひ合せて之を調へるなり。工、常に之を先見す、然れども外に形はれざるが故に、冥冥に觀ると曰ふ。

日の寒温、月の満ち欠け、四季の氣の浮沈を比較して調べ、相い合せて身体を調えるのです。鍼の上工というものは、常に先を見越しているものですが、氣に係わることは目に見えないが故に、冥冥に觀ると言うのです。

6-3 無窮に通ずれば、後世に傳ふ可し。是れが故に、工、異なる所以なり。

鍼の上工のこの見方は無窮に通ずるものですので、後世に残し伝えるべきものです。それ故に、鍼の上工とは、人とは異なっているのです。

3 三部九候論による治療

三部九候論・・・靈樞・九鍼十二原に對抗するための独自の論

莫知其情莫見其形正邪者不從虛之鄉來也以中人微故莫知其情意莫見其形狀上工救其萌芽必先見三部九候之氣盡調不敗而救之故曰上工下工救其已成救其已敗救其已成者言不知三部九候之相失因病而敗之也義備離合真邪論中知其所

7-3 上工は其の萌芽に救（とど）む。必ず先づ三部九候の氣を見、盡く調へて敗（やぶ、失敗する）ることなく之を救む。故に上工と曰ふ。下工は其の已に成りたるを救め、其の已に敗れたるを救む。其の已に成りたるを救むとは、三部九候の相ひ失へるを知らず、病に因つて敗れたるを言ふなり。

鍼の上工は、入った邪氣の萌芽のうちに止（とど）めます。必ず先づ三部九候の氣を見、盡く調えて、それ以上進行することがないうちにこれを止めるので、鍼の上工と言うのです。下工は邪氣が病を成し、身体が病を起こしてしまつてから病を治すのです。邪氣が病を成してしまつてから治すとは、三部九候脈が互いに失調しているのが分らなかった結果、身体が病に傷れてしまったことを言うのです。

■ 上工と下工

【靈樞】

9-10 麤守形、上守神、神乎神。客在門、未覩其疾、惡知其原。

9-10 麤は形を守り、上は神を守る、神なるかな神。客、門に在り、いまだ其の疾を觀ざるに、惡んぞ其の原を知らむ。

粗工は刺す形を守っているだけだが、上工は鍼治に付随する優れた精神を守つて刺す。上工の神技こそ、まさに神威の現れである。また、邪が体に取り付い

たばかりで、まだ病に罹ったといえる状態でもないのに、どのようにしてその原因を見極められるのだろうか。

二 刺之微在速遲。麤守關、上守機。

二 刺の微は速遲に在り。麤は關(關節)を守り、上は機(タイミング)を守る。鍼を刺す巧妙さとは、素早く行なうか、ゆつくり行なうかにかかっている。粗工は關節にある原穴の位置にだけこだわるものだが、上工は鍼の刺抜や運鍼のタイミングや、気の往来する気配を大事にしている。

【八正神明論】

7-4 其の所在を知る者は、三部九候の病脈を診て、處して之を治すを知る。故に其の門戸を守り、其の情を知らずして、邪の形はるるを見ると曰ふ也。

病の所在が分る上工は、三部九候の病脈を探し当て、處治して治す方法を知っています。故に、病の入り口となる門戸を守っているだけで、どんな病が襲ってくるか分らないのに、邪が現ればわかるのです。

■ 補寫法・・・方法(瀉)と員法(補)

情狀也 帝曰余聞補寫未得其意岐伯曰寫必用方方

者以氣方盛也以月方滿也以日方溫也以身方定

也以息方吸而內鍼乃復候其方吸而轉鍼乃復候

其方呼而徐引鍼故曰寫必用方其氣而行焉方猶正也寫邪

氣出則真氣流行矣補必用員員者行也行者移也行謂宣不行之氣令必宣行移謂移

未復之脈俾其平復刺必中其榮復以吸排鍼也鍼入至血謂之中榮故員與

方非鍼也所言方員者非謂鍼形正謂行移之義也故養神者必知形之肥瘦

8-1 ~ 2a,b 帝曰く、余、補寫を聞けども、未だ其の意を得ず。

岐伯曰く、寫は必ず方(逆らう)を用ふ。方とは、以て氣の方(まさ)に盛んならむとするや、以て月の方に滿ちんとするや、以て日の方に温かくならむとするや、以て身を方に定めんとする也。息を方に吸わんとするに鍼を内れ、乃ち復た其の方(まさ)に吸わんとするを候ひて鍼を轉ず。乃ち復た其の方に呼(は)かむとするを候ひて、徐ろに鍼を引く(抜く)。故に、寫は必ず方を用ゐれば、其の氣は而ち行ると曰ふ。

帝が言うには、私は、補寫法の存在について聞いてはいるが、その技術については知らないのだ、と。

岐伯が言うには、寫には必ず「方(逆らう)」の刺法を用います。「方」とは、気が盛んになる、月が満月となる、太陽が温かくなる時期を見計らって、患者の治療を行なうのです。息を吸おうとする瞬間に鍼を入れ、また息を吸おうとする瞬間に鍼尖を転ずるのです。一方、また息を吐こうとする瞬間に、静かに鍼を抜くのです。故に、寫法を行なうには、必ずこの「方」法を用いれば、患者の気は行りやすくなるのです。

8-3a-c 補は必ず員(ふやす)を用う、員とは行らず也、行らずとは移す也※1。
刺すは必ず其の榮※2に中(あ)てよ、復た吸ふを以て鍼を排す也。

故に員と方とは、鍼に非ざる也※3。

補には必ず「員(ふやす)」の刺法を用います。「員」とは行らずということであり、行らずとは他所へ移すということです。刺入するには必ず、榮分である血液の廻る深いところまで鍼を進めます。抜鍼の際には、患者が息を吸うに従って鍼を抜くのです。したがって、私の言う「員」法と「方」法とは、鍼の形のことではなく、気を廻らしたり、他所へ移したりする、気を扱う術のことです。

※1 『孫子』勢篇「木石之性、安則静、危則動、方(四角い)則止、圓則行」

※2 榮「榮衛」の榮、この場合は血液。

王注：・鍼入至血、謂之中榮。

※3 「鍼に非ざる也」 〓 九鍼十二原で述べられているような、鍼形を病状によって選択することではない。

■ 他篇・他書に現れる補瀉法

○ 【寶命全形論】・・・近法(寫)と遠法(補)

7-3a 人に虚實有れば、五虚は近(近速の刺法)勿かれ、五實は遠(遠遅の刺法)勿かれ、其の當に發せむとするに至らば、間に□(日+寅、まばたき)※を容れず。病人には虚實というものがあるので、五藏の虚の場合は『靈枢・小鍼解』にいう近速の刺法、五藏の實の場合は遠遅の刺法は、してはなりません。鍼の効果はたちまち現れるので、瞬きをしている暇ありません。

【靈枢・九鍼十二原】

だいせう

21 大要に曰く、徐にして疾ならば則ち實し、疾にして徐ならば則ち虚すと。實と虚とを言へば、有るが若く、無きが若し。

『大要』には実法と虚法について、鍼をゆっくり刺し、すばやく抜けば、実せしめることができる(実法)。また、刺鍼を早くし、抜鍼をゆっくり行なえば、虚せしめることができる(虚法)、と書いてある。実とは気が有るがごとくにな

り、虚とは気が無くなったごとくになる。

22 後と先とを察すれば、存るが若く、亡きが若し。虚と實とを爲せば、得るが若く、失ふが若し。

治療後とその前を考えれば、（実法の場合は）気が存るがごとくになり、（虚法の場合は）気は亡きが若くになる。虚法と実法を行なえば、氣を得ることも失くすことも自在である。

○【靈枢・官能 73】・・・八正神明論とは逆
寫は必ず員を用ふ。・・・補は必ず方を用ふ。

○【靈枢・官能 73】・・・八正神明論とは逆

寫は必ず員を用ふ。（刺入時）切して（撫でて）轉（めぐ）らせば、其の氣、乃ち行る。（刺鍼時）疾くして（抜鍼時に）徐ろに出だせば、邪氣、乃ち出ず。（その時に皮膚を伸して（邪氣を）迎へ、（押手を）搖らして其の穴を大（おほ）いすれば、氣、出づること乃ち疾し。

補は必ず方を用ふ。（刺入時）外のかた其の皮を引き、其の門に當らしむ。左（手）は其の樞を引き、右（手）は其の膚を推す。微かに鍼を（旋じて）徐ろに推す。必ず端にして以て正し、安んじて以て靜堅なれば、心、解くること無し。微かに以て氣を留めんと欲すれば、（鍼を）下して疾く出だす。其の皮を推せば、蓋し其の外門に、眞氣、乃ち存（のこ）らん。

用鍼の要は、其の神を忘るなかれ。

寫には必ず員法を用いる。刺入時に刺鍼部を撫でて、氣を廻らせば、患者の氣は廻る。刺鍼時に素早く刺して、抜鍼時はゆつくりと抜けば、邪氣は排出される。その時に皮膚を伸して、出てくる邪氣を迎え、押手を搖らして抜鍼孔を大きくすれば、邪氣が速く出る。

補には必ず方法を用いる。刺入時に刺鍼部の皮膚を引いて、刺鍼部をその穴に当てる。押手は刺鍼箇所を引き、刺手で皮膚を推しこむ。微かに鍼を旋じて、徐ろに推し入れるのである。必ず端正を心がけ、心を安らかにして、精神を靜堅に保てば、心が解隕になるといふことはない。微かに刺鍼部に氣を留めようとするなら、鍼は下した後、すばやく抜鍼する。抜鍼部の皮膚を押し込めば、皮下に眞氣が存（のこ）る。

用鍼の要は、精神集中を忘れてはならないということである。

●端正【素問・鍼解】

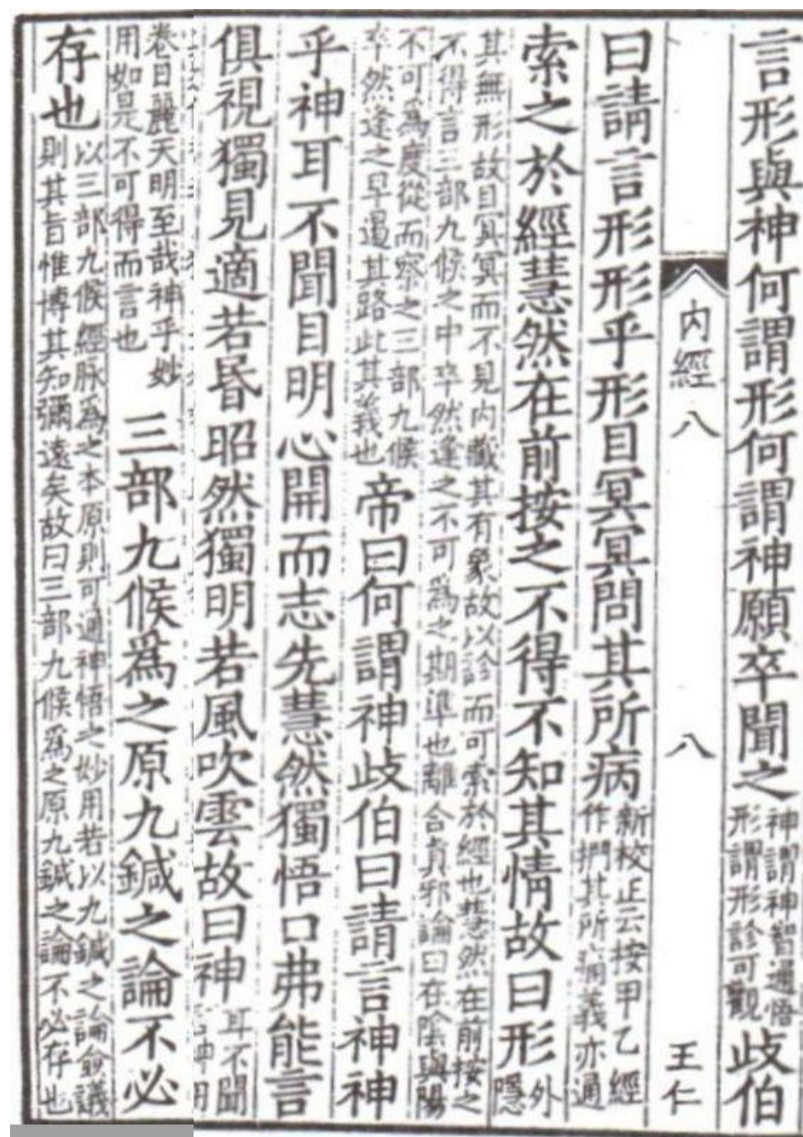
23 義無邪下者欲端以正也。必正其神者欲瞻病人、目制其神、令氣易行也。

23 義（ただ）しく邪（なな）めに下さざらんには、端にして正ならんと欲するなり。必ず其の神を正す者ば、病人を瞻んと欲して、目は其の神を制し、氣をして易行せしむるなり。

義しく邪（なな）めに鍼を下さぬようにするには、端生たらんとしなければならぬ。必ず精神を正し、病人を瞻するには、治療者の目が（自分の）精神を制しているとは分らなければならない。そうであれば、氣を易く廻らすことができる。

4 形と神・・・「冥冥」の世界に出入りする鍼工の神秘的・超人的能力

形、神の意味するところ



10-2a,b 岐伯曰く、形を言はむと請ふ。形なるかな形、目は冥冥なるままに其の病む所を問ひ、之を經に索※(もと)めれば、慧然として前に在れども、按ずるも得ず、其の情を知らず、故に形と曰ふ。

岐伯が述べるには、では形について述べましょう。形とは身体に現れる諸々の事どもであります。目には全く見えないまま、我々は病人の病む所を尋ねています。

病所を經脈に索めると、それははつきりと眼前にあるのに、按じても得られず、どんな状態なのかも分りません。従つて「形」とは、氣の働きを除いた、単なる物体としての身体であり、物体において氣が働きを「形(あらわ)す」のです。
※索は素に通ずる。したがって「素問」とは、黄帝が岐伯にくり返し問いたずねることを書名としていられると思われる。

10-3b 岐伯曰く、神を言はむと請ふ。神なるかな神、耳には聞えず、目、明らかに心開きて志を先にすれば、慧然として獨り悟り、口に言ふ能はず、俱に視るも獨りに見はる。適(ゆ)くに昏きを若※(えら)びても、昭然として獨り明るく、風の雲を吹く若し。故に神と曰ふ。

岐伯が言うには、次に神について述べましょう。神気なるもの、これも妙なることこの上もないものです。耳には聞えませんが、目を明らかにし、心を開き、五感よりも志を先にすれば、はつきりと自分の心で悟ることができます。口に

言ふこともできませんし、誰かとともに見えていても、その人だけに見られます。暗い中を選んで歩いているつもりでも、その人だけにだけは昭然として明るく、風が雲を吹きはらうごとくに現れます。故に神氣と言います。

※若 吾誰使、先若夫二公子、而立之。吾、誰をか使はして、先づ夫(か)の二公子を若(えら)びて之を立てん。私は誰かを派遣して、まず二人の公子から選んで(晋王に)立てよう。〈國語・晉二…『漢辭海』〉

【靈枢・九鍼十二原】

6 麤は形を守り、上は神を守る、神なるかな神。

粗工は刺す形を守っているだけだが、上工は鍼治に付随する優れた精神を守って刺す。上工の神技こそ、まさに神威の現れである。

9 刺の要は、氣、至れば有効なり。効の信は、風の雲を吹くが若し。明らかなるかな、蒼天を見るが若し。刺の道、畢んぬ。

鍼治療の要は、氣が至れば有効だということである。その徴(しるし)は風の雲を吹き払う如くである。それは明らかで、蒼天の現れるが如くである。刺の道についてを畢る。

■三部九候論治療Ⅱ素問派医学の称揚

11 三部九候、之が原を爲せば、九鍼の論、必ずしも存(のこ)ることなし。

三部九候の脈診とそれに基づく治療とは、これまでに述べた身体に形として現われる力と、その力の元となる神氣との源であります。靈枢經に言う九鍼の論などは、必ずしも今後存(のこ)ることはないでしょう。

■「神乎神」について

孫武『兵法』虚実第六

神乎神乎、至於無聲、故能爲敵司命。

神なるかな神なるかな、無聲に至る、故に能く敵の司命を爲す。

神秘、神秘、最高の境地には何の音もない。そこで敵の運命の主催者になれるのだ。

〈岩波文庫 金谷治 訳〉

神字解・・・天の神、精神のすぐれた働き



申



神

〈いずれも金文〉

申は電光が斜めに屈折して走る形で、神威の現れるところ。説文に「天神なり」とし、「萬物を引き出すものなり」と、神・引の疊韻をもって訓ずる。

神は天神で祖霊を含むことはなく、人の霊には鬼という。神事のみでなく精神のはたらきや、そのすぐれたものを神爽(しんそう)・神悟のように言い、人智を越えるものを神秘という。

〈白川静『字統』〉

靈樞の「神乎神」は、当然、孫子にある「神乎神乎」の乎字をひとつ除いたものと考えなくてはならない(押韻のためか)。義は「神なるものかな、神なるものかな」であろう。

「神」は、白川先生の説くように、精神の働きの優れたもの、人智を超えたものの、ということとなる。

「神乎神」をこのまま靈樞の文脈に沿って読むなら、下の神は「上工の神技」、上の神は「人智を超えてすぐれたもの」と読むのが妥当と考えられる。



風信雲書自天翔臨 披之閱之如揭雲霧。兼

風信雲書、天より翔臨す。之を披(ひら)き、之を閱するに、掲せる(蓋、覆い、幕などを開ける)如くに雲霧す。

〈空海「風信帖」より〉

風に乗った、雲に乗った御僧(最澄)からの信(たより)が、天を翔んで私の許へ参りました。開き拝見したところ、幕を開けたように御僧に対する気持ち晴ればれと致しました。

5 結 語

以上、見てきたことから、「八正神明」とは、時節によって変る風を詳しく観測し、また邪風を避けることによって、その時々の人々の神、すなわち精神の働きのうちの優れたものを明らかにすることができ、また治療者においても、自分の神を高潔に保つことができる、ということを表していると思われる。